

2018年3月25日(日)／説教者:神谷武宏

説教:「イエスの死」

聖書:マルコによる福音書15:33～41

「イエスの死」は、非常に大事な教義である。イエスが死なれたということは、「イエス」というお方が、私たちと何一つ変らない肉体を持っておられたからこそ「死」というものがある。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と大声を出して息を引き取られたが、何故イエスの最後をこのような惨めな書き出しにしているのか？ 宗教たるものは、本来神を美化し、勇ましい死、勇敢な最後の描き方をするものではないか？

初期キリスト教界の時代にキリスト教グノーシス主義なるものがあつた。その思想は、霊こそ神であり、善である。逆に肉は悪、肉なるもの、全ての被造物は悪、汚れたものであると考えた(二元論)。この考え方は、被造物の創り主、創造主を否定し、イエスも霊であつて肉体を持っていたのではなかったと考えた。それは、イエスの十字架、苦難というものではなかったとするもので、神の神々しさ、神秘的な部分を強調するものであつた。そういう考え方に対抗する意味でもイエスの死、人間イエスの強調がある。

神は、人間の姿で、死に至るまで、十字架の死に至るまで人間であつた(フィリピ 2:6)がゆえに苦しみ、最後に惨めとも思える姿をさらした。しかし神は、ゆえにあなた自身の苦しみを知っておられるのである。誰にも言えない、理解してもらえない、あなたの苦しみ、悲しみをイエスをご存知なのである。

もう一つ。イエスが息を引き取られると、「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた」とある。それは何を意味するのか？ エルサレムの神殿は、歴史の中で権力と結び付き、財力と結び付き、やがてそれは、力を持たない、弱くされ小さくされた存在、お金を持たない貧しくされた存在、あるいは体に「障害」を持った者たちを寄せ付けない閉鎖性を帯びていた。神殿の垂れ幕は、聖なる空間を清く保つために、民衆に対し、社会に対し堅く閉ざされた仕切りであつたのである。イエスの死は、そのような意味の垂れ幕を真っ二つに切り裂く出来事だつた。

神から遠ざけられ、神の恵みを分かち合うことから疎外されていた人々に、今や神の恵みと力がその裂け目から溢れ出てゆく。聖書は、イエスの生と死の意味をそのように語っているとと言える。(神谷)